

埋

うすみび

火

立原正秋

埋(うずみじ)火

昭和五十四年六月十日 発行
昭和五十四年七月二十五日 三刷

著者 立たち原はら正まさ秋あき

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一番地

郵便番号一六二振替東京四一八〇八

電話 (編集部)〇三一二六六一五四一一

(業務部)〇三一二六六一五一一

印刷 東洋印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

定価 九五〇円

© Masaaki Tachihara, Printed in Japan, 1979.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

跋	水	山	山	一	埋	吾	仮
		居	水	夜		亦	の
	仙	記	図	宿	火	紅	宿
190	159	135	115	93	55	33	5

裝幀
高山
辰雄

埋（うずみび）火

——立原正秋創作集

仮
の
宿

日になんど鏡の前に坐ることだろう。それは女の性だ、と言ったのは別れて行った男だった。鏡には三十三歳の女の顔が映っている。顔のうしろには広いガラス窓越しに軒下の数輪ひらきかけた紅梅の老木と降りはじめたばかりの雪が映っている。

結婚してから半年、行き暮れた思いが続いていた。感情のなかに明るい場所と蔭の部分があり、これまでは、おのおのの占めている広さは変らなかつた。蔭の部分は一色ではなく、濃淡があり、場所によって斑になっていた。明るいところは、あかるいといっても明確なあかるさではなかつた。暁方のような平明なあかるさなら安堵できたが、それより不分明だった。結婚して三カ月ほど経った頃、この明るい部分をもっと明確にしていかなければ、と思いつながら、そこに辿りつけなかつた。安堵できないのは夫のせいではなくこちらの心情の問題だった。

こんな雪の日の午後、食事の支度をすませてから鏡にむかい、男がおきてくるのを待ったことがあった。やはり庭で若木の白梅が数輪ひらいていた日だった。北山伏町の小さな借家だった。男とできてから一年目の春のことである。

鏡に映った顔に蔭の部分がさっきよりひろがっていた。ひろがった分だけ明るい場所が蝕まれていた。考えてみたら、ここまでひろがるのに三十分とかかっていなかった。

出入りしている銀座の呉服屋の番頭が品物を届けてきたのは正午すこしすぎだった。

「あら、なにか仕立物をたのんであったかしら」

「いえ、御結婚のお祝いだそうでございます」

六十がらみの番頭は、いつもは部屋にあって茶をのんで帰るのに、嵩張った畳紙を勝手口のあがり框におくと、包んできた風呂敷を立ったまゝいそいでたたんだ。

「いまごろお祝いって、誰方からなの」

「とにかくお届けするようにとのことでした」

番頭は、ごめんくださいまし、と言ってそそくさと勝手口から離れて行った。

下駄をつっかけて裏口に出てみたら、番頭はもう木戸の向うを歩いていた。

畳紙は二つあり、ひとつは着物を一枚包んだ厚みだったが、もうひとつはその倍の嵩があった。新橋の座敷にでていた頃の客からかしら、それにしても嵩のある着物だ、贈るな

ら反物が普通なのに、仕立てて贈ってくれるとはどういふことだろう。自分の居間に運び、多少の不安と期待がいりまじった気持で畳紙をあけてみたら、朱色が目にとびこんできた。嵩のある方には朱色の絹の袷の湯文字が五枚、もうひとつの方にはやはり朱色の単の湯文字が五枚はいっていた。誰がこんなのを……と思ひめぐらしたのはほんのすこしの間で、それから、あっと声を噓んだ。別れていった男の軀がこちらの軀のなかをよぎって行った。どうしようもなかった。いまごろになってこんな残酷なことを……。ひろげた湯文字をまじまじと視つめているうちに、男と軀を交しあった二年間が蘇ってきた。残酷にはちがいがなかったが、目の前の真新しい湯文字には男とのなまぐさい日日が刻まれていた。かつて男の前で軀をひらいた日日がこんなかたちで再現されるとは……。

鏡の水色の綸子の被いをあげ、男がよぎっていった女の顔を映してみた。顔のうしろの右方には紅梅と灰色の空が映っており、左方には畳に朱色の湯文字がひろがっている。雪が舞いはじめたのはそれから間もなくだった。明るい場所が夫との世界で、蔭の部分がかつての男との日日だった。斑になっているところはかつての男とのまじわりのあとを思わせた。洗っても落ちないので捨てた湯文字もあった。結婚するとき、新しく湯文字をこしらえ、それまで軀につけていた湯文字は全部捨てた。新しい湯文字に希望があったわけではない。妻をなくし、所帯を持った息子は勤務先の関係で地方におり、娘を嫁がせた二十

五歳年上のなじみの客から、身のまわりの世話をしてくれないか、と申しこまれたとき、いいわ、とあっさり応じたのは、戻ってこない男とのあいだにふんざりをつけるためだったのか。男が去ってから四カ月、くたくたになっていたときだった。そして二カ月後にこの家にはいったが、いまでも仮の宿という思いが絶えなかった。

朱色の湯文字の背後に男との二年間が見える。

男にはじめて会ったのは新橋の座敷だった。呼んでくれたのは、ある電機会社の二代目の若い社長だった。

「この男はね、大学時代の同級生だ。本職は小田原の禅寺の坊さんだが、十年ほど前までは板前をやっていた。生臭坊主だから有髪だ。顔をよく見物しておけ」

と社長が紹介してくれた。

男の顔にはすこし取っつきにくい感じがあったが、冷たいところはなかった。二人とも四十をこしたばかりの男ざかりだった。

つぎに男に会ったのは、半月ほどすぎた三月の初旬で、小舞を習っている世田谷の狂言の家元だった。稽古をすませて玄関をでてきたら、男が門からはいつてきたのである。

このあいだは有難うございました、と座敷の礼を述べたら、男はしげしげとこっちをみていた。

「珍しいところでお会いするものですわね。狂言をおやりになっていらっしゃるのですか」

「いや、ここは檀家です。あなたは狂言を……」

「いえ、あたしは小舞をすこしばかり。あれから新橋には……」

「いや、あいつがさそってくれたときだけです」

「たまにはおひとりでお出かけくださいまし」

「そして、あなたを呼びますか」

「そうしてくだされば嬉しいんですけど」

商売上の表向きの挨拶ではないつもりだった。芸者ほど裏と表のちがう女達もいなかった。十九のときに芸者になり見すぎるほど見てきた世界だった。使いわけを教えてくれるのは置屋のおかみであり、同時に、水になじむことでおのずと身についてくるのであった。いつだったか、人形をつくっている会社の重役が、ある小説家を新橋に招いたことがあった。そのとき、明治らしいの芸者のありかたの話になり、小説家がつぎのように言った。

「明治らしい、いろいろな小説家が芸者を描いていますよ。永井荷風、徳田秋聲、川端康成、舟橋聖一、ほかにもいるかもしれない。そのなかで、康成の『雪国』の駒子だけが女ですよ。あとはみんな冷たい非人間的な女達ばかりです。彼女達はセックスの道具として

の自分をみがいてきたんですね」

小説家は言いたい放題のことをしゃべって帰った。あとで仲間の芸者の一人がその小説家に反感を示したが、それだけにその小説家の言葉はあたっていた。反感を示した芸者は、旦那がくる日は日になんども女を洗っておくという女だった。

そうした冷たい非人間的な女にはなりたくない、と思ひながら、いろいろな客に接してくると、どうしても裏と表がちがってくるのであった。

男が新橋に現れたのは三月末だった。八時すぎに呼ばれていったら、しば結城の着流しで酒をのんでいた。いまだき着流しの客は珍しかったが、日本橋のあるところで茶事があり、その帰りだとのことだった。

座敷がひけてから、もうすこし飲もうということになり、新橋の帰りによくたちよる神楽坂のスナックバーに男を案内した。二十五歳の秋、四十八歳になる印刷会社の社長が旦那になり、そのとき自前になったが、社長は三カ月後に心筋梗塞で亡くなり、なにか悪い夢をみたような気がしたが、スナックバーで独り酒をたしなむようになったのはその時分からだった。神楽坂から北山伏町は近いので歩いて帰ることが多かった。

「三カ月とはまた短かったね」

「ですから、いまでも悪い夢をみたような気がしています。情がうつるひまもなかつ

たでしょう」

「それから旦那はできなかったのかね」

「それから三人の人から申しこめました。でも、続けて悪い夢をみるような気がして」

「では、女になる時間もなかったわけだ」

「はい。あたし、まだ……なっていないと思います」

「三十歳になる芸者がまだ女になっていないなど、そりや不幸というものだ」

あのとき、過去を男にしゃべったのは、酒のせいだったのか。

この夜、男を北山伏町にとめたのは成りゆきではあったが、なるようになれ、といった気持からではなかった。狂言の家元の玄関前で会ったとき、すでに女の感情が芽生えていた、と解釈した方が正確だった。

あくる日の昼すこし前、男は帰ったが、玄関で、

「僕は旦那にはなれないよ。そんな趣味がないんだ」

と言った。

「いいんです。ときたまいらしてください……」

男よりはやく起きて食事の支度をすませ、それから鏡にむかったが、一夜をさかいにして女になった顔が眩しかった。男の顔もまともにみられなかった。

男がでていつてから、もういちど鏡の前に坐り、自分をたしかめてみた。まぎれもない変容がそこにあった。ただ、男がでて行つたとき、これっきり来ないかもしれない、という思いはあった。こちらに女の感情があるにせよ、男とのあいだがまださだかではなかった。

桜が散り終つた頃、男は、比目魚を一枚ぶらさげて現れた。昼すこし前で、洗濯物をほしあげたときだった。

「今朝あがつたやつだ。新幹線だどこまで一時間半でこれるな」

男は俎板をださせた。

いつもは座敷にでる直前に化粧をするので、白粉気のない顔を男にみられてあわてた。男が魚を割いているあいだに、いそいで簡単に化粧をした。ささやかな期待とささやかな不安のあいだを揺れながらすごした日日だった。それだけに、男が現れてみると、じわじわと女の感情が噴きあげてきた。

「おひる、まだでございましょう」

「まだだ。きみは」

「あたし、いつも、二時頃にすませて、それから支度をしてでかけるんですが、もうお米はといであります。炊きましようか」